マルト・スタムの論考「オランダと私たちの時代の建築芸術」をめぐる論争 THE CONTROVERSY BEGAN WITH MART STAM'S ARTICLE, 'THE NETHERLANDS AND ARCHITECTURE OF OUR TIMES'

法澤 龍宝*, 田路 貴浩**
Ryuhō HOSAWA and Takahiro TAJI

From the perspective to analyze on the 1920's Swiss modern movement, this paper aims to clarify the significance of the controversy began with Mart Stam's article on Dutch architecture, published in 1923. Stam introduced development of Dutch architecture oriented by H. P. Berlage, and considered on urbanism. Two Swiss architects, however, refuted Stam's assertion. In chapter 2, through tracing the process of the controversy, it was found out that the controversy consisted of four issues, 'rational', 'spiritual', 'urbanism' and 'lively'. In chapter 3, through structuring each issue, it was considered that how Stam's issues was discussed by Swiss architects.

Keywords : Hans Schmidt, Mart Stam, Switzerland, Modern Architecture, "Swiss Construction Magazine"

ハンス・シュミット, マルト・スタム, スイス, 近代建築, 『スイス建設新報』

1. はじめに

1-1 問題の背景

スイスの近代建築運動の展開を迎えれば、ハンス・シュミット (Hans Schmidt, 1893-1972) やマルト・スタム (Mart Stam, 1899-1986) を中心とした ABC グループによる貢献が大きい。ABC グループとは雑誌『ABC : 建設への寄与 (ABC: Beiträge zum Bauen) 』(以下『ABC』と略記)の刊行^{注1)}を契機に集まった建築家集団である^{注2)}。『ABC』上において、工業化や都市化などの問題に着目し、彼らは自身の建築理念を唱導した^{注3)}。メンバーの多くは、後の CIAM においても献身的な活動を行い、国際的な近代建築運動の発展にも大きく寄与した^{注4)}。

ABC グループは、保守的な応募案が評価されたバーゼル・ヘルンリ墓地設計競技 (1922 年)、および『スイス建設新報 ("Schweizerische Bauzeitung) 』(以下『建設新報』と略記)における論争 (1923 年) を契機として成立した。後者の論争においては、スタムが執筆し、シュミットが翻訳した論考「オランダと私たちの時代の建築芸術」にたいし、チューリッヒの建築家、エドヴィン・ウィプフ (Edwin Wipf, 1877-1966) はスイスの伝統的構法を擁護する立場から、ルツェルンの建築家、アーミン・メイリ (Armin Meili, 1892-1981) はロマン主義を標榜する立場からそれぞれ反論した。この二つの出来事を経て、スイス国内の伝統・保守的な建築動向にたいし、自らの思想と活動を公にするための場として、スタムとシュミットは『ABC』を自主的に刊行し、自らの言論活動を行った^{注5)}。

このように、『建設新報』における論争は、後の ABC グループの

近代建築運動の展開を探る上で、大きな出来事であったことが推察される。とりわけ、オランダやスウェーデンをはじめとする他国の潮流についての議論が交わされており、これらを参照しながらあるべき建築像が問われた。

1-2 研究の目的と方法

本研究においては、ハンス・シュミットの建築思想とABCグループの展開を解明する立場から、論争の背景をふまえ、論争における各論点を抽出し (第2章)、その構造の分析をとおして、スイス国内でどのようにオランダ建築の受容がされ、または批判されたのかを考察すること (第3章) を目的とする。論争への直接的関与が確認できる以下の記事^{注6)}を一次資料とする (表1)。

表1 資料一覧		
著者	題名	発刊年月
スタム	「オランダと私たちの時代の建築芸術」 ^{注7)} (以下「オランダ建築」と略記)	1923. 10-11
ウィプフ	「(論評) オランダと私たちの時代の建築芸術」 ^{注8)} (以下「論評・オランダ建築」と略記)	1923. 12
メイリ	「私たちと国外の建築」 ^{注9)} (以下「国外の建築」と略記)	1924. 1
シュミット	「往復書簡—ストックホルム市庁舎について」 ^{注10)}	1924. 3
メイリ	(以下「往復書簡」と略記)	

既往研究として、1920年代のシュミットやスタムの活動を取りあげた S・イングバーマンや E・マンフォードによる研究^{注11)}がある。これらの研究は、彼らの活動の実態と論争の関係を探る上で参照で

* 京都大学大学院工学研究科 博士後期課程・修士(工学)

** 京都大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

きるものである。シュミットに関する既往論考としては、建築雑誌『ヴェルク (Werk)』59 巻 10 号 (1972 年、シュミット追悼特集) に掲載された 3 編の論考^{注 12)}、およびシュミットの作品集に所収の事績紹介^{注 13)}などがある。また、矢代真己は一連のマルト・スタム研究^{注 14)}をとおして、活動、理論、実践の各側面の特質と意義について分析し、スタムの建築思想を包括的に解明した。なかでも、「建築家マルト・スタムの近代建築理念の性格と特徴について」(注 14) 参照)、および「建築家マルト・スタムの論考「オランダと現代建築」」(日本建築学会学術講演梗概集(関東)F-2、pp. 94-98、2001. 7) は本稿と近接する。前者は 1926 年から 27 年にかけて執筆されたスタムの論考を対象とし、彼の鍵概念である「モデルネス・パウエン」について考察したものである。後者は本稿でもとりあげる 1922 年から 23 年にかけて執筆された「オランダと現代建築」^{注 15)}に着目し、記事概要と所収図版を紹介したものである。本研究においては ABC グループの思想的展開を明らかにする立場からこの論争に着目し、反論者の論点も踏まえて論争の構造を明らかにする。

2 論争の概略

2-1 スイスにおける建築界の動向

分析に先立ち、論争の背景にあるスイス建築界の動向を整理したい。この時代のスイス国内の建築思潮を包括的に論じた資料はないため、当時の建築雑誌の記事を手がかりにその把握を試みる。

まず、スイス建築家連盟の中で、建築界における様式上の混乱を危惧し、スイスらしい解決策を求める傾向があったことを確認できる。同連盟に所属する建築家アルフレッド・ヘージッヒ (Alfred Hässig, 1880-1943) は、自身の研究に基づいて、スイス建築界における極端な個人主義・表現主義の台頭による建築様式上の混乱を問題とし、「私たちの建築芸術における現代的潮流 (Moderne Strömungen in unserer Baukunst)」という論題のもと、1923 年 7 月から 1924 年 1 月にかけて『ヴェルク』において議論を試みた。ヘージッヒを含む 5 名の建築家連盟所属建築家の論考が同誌に連載された^{注 16)}。

ヘージッヒは混乱の主要因として 1) 連邦工科大学を中心とする国内のアカデミズムの停滞と、2) 国外の建築潮流からの影響を指摘した^{注 17)}。5 名の建築家は、総じて建築界の混乱について問題視するものの、その打開策については多様な見解を示した。たとえば、パウル・カメニッシュ (Paul Camenisch, 1893-1970) は、スイス連邦工科大学を「形態の倉庫」とできるとし、形骸化された様式の修得に重点が置かれていることを批判した。その解決策として、彼は理想的な「形態」と「内容」の関連を見出し、建築空間におけるその連関を再考すべきであるとした^{注 18)}。一方、マックス・ミューラー (Max Müller, 1874-1932) は、溪谷都市シオンの歴史的に形成された都市景観を賞賛する一方で、連邦工科大学出身の若手建築家が参加する一連の建築設計競技では、多くが伝統から逸脱し、国外の個人主義・表現主義から影響をうけた表現に傾倒していることを批判した^{注 19)}。ヘージッヒは最終回において、混乱という点については共通した危機意識を確認できたが、解決策についてはまとまった見解を導き出すには至らなかったと結論づけ、失意を示している^{注 20)}。

だが、一概に国外の建築やアカデミズムにたいする否定的な意見が主流だったとも言いがたい。例えば、連邦工科大学の教授であり、アカデミズムの中核にいた建築家カール・モーザー (Karl Moser,

1860-1936) は自身のオランダ旅行での見聞に基づき、同誌にオランダ建築にかんする論考を寄稿した^{注 21)}。また、同校の都市計画の教授であるハンス・ベルノウリは、ヘルンリ墓地設計競技におけるシュミットやハennes・マイヤーの落選案をとりあげ、若手建築家の個人の能力によって現況の打開が可能になるだろうと述べている^{注 22)}。

これらの記事を鑑みれば、ヘージッヒの主張に代表されるように、スイスらしい解決を求めた保守派の建築家が建築家連盟の中で台頭していたこと、K・モーザーやベルノウリなど若い世代の連邦工科大学の教員は保守派とは正対する見解を示していたことが確認できる。

2-2 「オランダ建築」執筆の過程

『建設新報』における論争はスタムの論考「オランダ建築」をきっかけに展開された。シュミットは 1921 年から 1922 年にかけてロッテルダムの設計事務所で修行し、その間にスタムとの交遊を深めた。1923 年 10 月、スタムは K・モーザー事務所に勤務するためチューリッヒに滞在しており、またシュミットはイタリアへの小旅行から帰国し、自身の設計事務所を設立するための準備をしていた (1924 年 1 月設立)^{注 23)}。シュミットの仲介を経て、スタムは『建設新報』にオランダ建築を紹介する論考を寄稿することを決意し、その独語訳はシュミットが担当した。このスタムの論考は 4 回にわたり連載された。「1. (無題)」、「2. ハーグ・グループ」、「3. アムステルダム・グループ」、「4. 都市計画」と題が付されている。執筆日として、第 1 回は 1922 年の終わり、第 2 回は 1923 年 1 月、第 3 回は記載無し、第 4 回は 1923 年 7 月と記されており、スタムがチューリッヒに滞在する以前から執筆に着手していたことが伺える。

2-3 論争の構図と展開

論考「オランダ建築」の本文では、オランダ建築の潮流の考察に重点がおかれている。一方、本文に並行して配置された図版、およびキャプションでは作品解説が行われるが、本文の内容とは直接関連づけられてはいない。では、「オランダ建築」の概略を確認してみよう。第 1 回の冒頭では、19 世紀から継承される新古典主義を批判し、これに続き H・P・ベルラーへの「アムステルダム証券取引所」の解説を軸にベルラーへの「合理的理念」が論述される。第 2 回ではハーグ・グループ^{注 24)}についての考察が行われ、ベルラーへの合理的理念を「物質の力」として継承し、構築と素材の実直さの表現を目指した集団であると述べられる。第 3 回ではメイ&クラマーの「アムステルダムの航海小屋」が冒頭でとりあげられ、ベルラーへの活動を継続しながらも、その合理的理念とは異なった発展を遂げたグループとして捉えられる。アムステルダム・グループ^{注 25)}が精神的解決としての「喜び」の表現をおこない、また、都市計画において「活動の流れ」に着目したことをスタムは称揚する。第 4 回では、第 2 回の「物質の力」、第 3 回の「活動の流れ」を発展させ、自身の「都市計画」の理念が論述される。

「オランダ建築」刊行の直後、ウィプフはこれにたいする「論評・オランダ建築」を、メイリは 3 回にわたって連載された論考「国外の建築」を『建設新報』に寄稿し、スタムの論点に反論した。ウィプフは、「論評・オランダ建築」においてスイスの伝統技術を擁護する立場から批評した。ベルラーへ、ヴィボエト&ダウカー、アムステルダム派、スタムの建築作品を批判し、伝統主義にたいする自身の見解を論述した。また、メイリは、「国外の建築」において「情念」を求めることが「精神的独立」の表現であるとし、「あからさまな裸

体」であるオランダ建築を批判した。そして R・エストベリによる「ストックホルム市庁舎」をとりあげ、精神的独立を満たした建築物の実例を詳述する。このメイリの批判にたいし、翻訳を担当したシュミットはスタムの見解を擁護する立場から、書簡をメイリ宛に送付する。シュミットはオランダやスウェーデンの解決法にとらわれないスイスの方策を模索すべきだと応答する。

以上より、「オランダ建築」の論点がウィブフ、メイリによって批判され、メイリの論点に対してシュミットが応答をおこなうという構図で議論が展開したことが確認された。スタムの「オランダ建築」においては、ベルラーへの「合理的理念」を素材の合理性として継承したハーグ・グループと、精神的表現として発展させたアムステルダム・グループについて考察され、ウィブフは合理性の観点から、メイリは精神性の観点から批判を行った。したがって、合理性と精神性は論争でとりあげられた主要論点であることが把握できる。また、第4回において、スタムが展開した「都市計画」、および、第1回から第4回までを通して示される「生き生きとしたもの」の観点は、論争上では大きくとりあげられることはないが、スタムの論点を捉える上で重要だと思われる。以上の理由から、1)合理的なもの、2)精神的なもの、3)都市計画という3つの中心論点、および、4)生き生きとしたものというスタムの思想に通底する観点についても論争の主要論点とし、次章において議論の構造の解明を試みる。

3 各論点と議論の構造

3-1 「合理的なもの」をめぐる議論

スタムは、「オランダ建築」第1回、第2回において、ベルラーへの「合理的原理 (rationalistische Prinzip)」の展開を考察した。これは伝統主義の立場からウィブフによって批判された。本節では、両者が示した「合理的なもの」に着目し、議論の構造分析を試みたい。

スタムは、ベルラーへの「否定 (Negation)」^{注26)}の理念に着目する。アムステルダム証券取引所の家具や細部のデザイン^{注27)}において、本質的ではない形態、装飾、コーニス、鏡板を省略しており、無駄なものを排除するとともに、各部位の機能における「根源の意味」を意識することで、機能的合理性が導かれるとした。この「否定」の理念はハーグ・グループの建築家によって、「物質の力 (Kraft der Materie)」として展開される。ハーグ・グループの思想的背景には、急速的な都市化の問題、すなわち交通網や巨大建造物の台頭がある。これを可能にするのは第一に技術的な事柄であり、建物を構成する素材そのものである。ハーグ・グループは「否定」という反省的作用を出発点とし、「情け容赦ない、知的な芸術解釈」である「抽象概念」としての造形理念へと発展させ、「素材の本質」の追求と「強い構造的性格 (stark Konstruktive Art)」を建築物に表現することを導き出した。なかでも「素材の本質」について、「煉瓦は加工機械に張り巡らされた銅線によって切り出され、直角の形態である。木材は直線的な繊維をもっており、製材所で平らな板材へと加工される。」^{注28)}と具体的に示される。素材がもつ物質的特性を厳格に把握することで、構造的性格が明確に表現されることを目指していたといえよう。スタムはハーグ・グループの合理的理念は、本来的に「新しい世界の純粋性と真性の発生」を目指したものであるとしており、ベルラーへからハーグ・グループへの合理的なものを巡る展開のうちに、新しい世界の秩序構築の方策を見出していたことが把握できる。

これにたいし、ウィブフは伝統的なものの合理性に着目した。まず、機械と手仕事を比較し、手仕事の方が正確性において優れることを指摘する。なぜならば、大工や板金工、指物師などの職人は、気候の動きをその仕事のうちに考慮しているからである。ウィブフはこの職人業を「建築材料の正しく自由な使用 (richtige Verwendung unserer Baumaterialien)」を実現させるものであるとし、ベルラーへやハーグ・グループに代表される過度に技術や機械を重視したアプローチに反論する。また、スタムは形式的な伝統からの開放を目指したのにたいし、ウィブフは伝統の様式の機能合理性に着目する。例えば、ルネサンス建築などのヴォールト天井の引用はただの形態模倣として否定されるが、コーニスは建物を風雨から守るためのものであり、これを引用することは機能的合理性を担った様式の模倣であるとして肯定される。オランダ派の過度に合理主義を追求した「独創的」建築作品にたいし、気候や風土にもとづいた機能的合理性の解決をウィブフは課題として提示した。

3-2 「精神的なもの」、「情念」をめぐる議論

スタムが示した「精神的なもの (Geistreiche)」の観点到にたいして、メイリは論考「国内の建築」において「精神的独立 (geistige Selbstständigkeit)」と「情念 (Pathos)」を重視する立場から反論した。

スタムの論考「オランダ建築」においてはハーグ・グループ、アムステルダム・グループそれぞれの精神的解決が示されている。ハーグ・グループはベルラーへの合理的原則を継承し、課題に内在する本質と素材の種類を合理的かつ客観的に理解し、内部の力から建築創造するという精神的解決を実践した。一方、アムステルダム・グループの制作方針は「退屈さ」からの脱却を目指す建築家の「喜び (Genuss, Freude)」に基づいており、個人主義的、幻想的な表現には半ば疑問を呈しながらも、ハーグ・グループの合理主義とは異なった「精神的解決」を導きだすものであるとスタムは言う。「喜び」は「形態の喜び (Formenfreude)」、「構築の喜び (die Freude an der Konstruktion)」、「素材の喜び (die Freude am Material)」としても形容され^{注29)}、作品に「強い表現」を能動的に付与する。また、スタムはこの能動的な「喜び」は受動的な「情念」とは異なった性質のものであるとしている。このようにスタムは、ハーグ・グループの素材の合理性追求とアムステルダム・グループの「喜び」の表現を、それぞれの精神的解決として捉えていたことが把握される。

これにたいし、メイリは中小国としてのスイスの土着性・国民性を重視する観点から、建築制作における「精神的独立」を主題とする。彼は、同じ中小国であるオランダ派の傾向は「ある重大な発展の最終形態」^{注30)}であるとして一定の評価をおこなうが、その独創的な形態にたいしては「あからさまな裸体 (klare Nacktheit)」として批判する。そこでメイリはロマン主義の方策に見出し、スイスにおいても参照すべき傾向として「シュツットガルト駅舎」^{注31)}と「ストックホルム市庁舎」^{注32)}をとりあげる。そして、第2回、第3回において「ストックホルム市庁舎」に着目し、技術的考察^{注33)}をふまえながらも、北欧の民族ロマン主義^{注34)}を評価する立場から作品分析が行われる。なかでも、メイリは尖塔部にある「三つの王冠」の表現を強調する。この王冠は装飾的な紋章上の意味を取り除き、三人の王のもとに大国スウェーデンが統治されていることを表しており、「ストックホルムの本来の象徴」を形成するものだという。メイリはこの「三つの王冠」に代表されるような即物的かつロ

マン主義的なデザイン手法は、建築家の「情念」によってもたらされるとし、「古い手段の上で新しい方法を演じたのか、あるいは新しい手段の上で古い方法を演じたのかということについて、言及するのは難しい」^{注35)}と述べ、上記の技術的考察をふまえ、「情念」の表現が「精神的独立」を満たしていることを賞賛している。

メイリが示した「精神的独立」にたいして、シュミットは「オランダ建築」の訳者の立場から「往復書簡」において応答する。シュミットは、ストックホルム市庁舎の表現上の混乱について、イタリアの芸術に起源を有する「メルヘン (Märchen)」な表現であるとしながらも、メイリがストックホルム市庁舎を「日常の問題 (Problem des Werktags)」として捉えたところに意義があるという。加えて「＜現実的な＞オランダ人が考えた方法だけではなく、形式的で精神的な現代建築の問題について全ての他の方法を探さなければならない」^{注36)}と述べ、スイスにおける精神的な解決方法の必要性を指摘する。

3-3 「都市計画」―建物から都市へ、都市から世界都市へ

一方で、「オランダ建築」第4回で示された「都市計画 (Stadtbau)」については、ウィプフが「スタムが示した都市計画では交通のため、人間の需要を満たすための通りが計画されており、健全な発展を可能にする」^{注37)}と述べるに留まり、中心的な議題としては扱われなかった。だが、第4回の言及からは「都市計画」がスタムの建築思想において中心的論点を形成していたことが伺える。本節では、スタムの「都市計画」を辿り、その意義についての考察をおこなう。

前述のように、スタムはハーグ・グループの論述(第2回)においては都市的問題を解決するための「物質の力」に着目し、素材特性の合理的理解を求めた。また、アムステルダム・グループの論述(第3回)では、「アムステルダム市南部にある作品」^{注38)}における「活動の流れ」をとりあげた。次のスタムの言葉に着目したい。

「アムステルダム市南部にある作品においては、偉大な効果を示される。すなわち、ファサードは街路側の壁面部のみに限定されるのではなく、棟やヴォリューム、空間の表現を可能にするバルコニーは、空間的構成を目指し、個々にデザインされたファサードが表現される。彼ら建築家は街路空間の生き生きとした力 (lebendigen Kräfte der Strassenräume) を知り、これを形成することを学んだ。すなわち生活と活動。これらは壁に沿って導かれ、入口を通りぬけ、階段に沿って住居まで導かれる。彼らはこの意味を発見した。すなわち、活動の流れ (aktiven Ströme) である。・・・(中略)・・・彼らは、ある部屋において、その空間が壁、床、天井に囲まれており、これらの要素は生活をその空間の向こう側へと流れ出させるものであることを確認した。例えば、ドアは彼らにとっては木板以上のものであり、開口部を塞ぐものである。すなわち彼らはこの幾度も閉じたり開いたりを繰り返す運動を確認した。彼らは合理主義的教義にたいして全くの関心を示さないが、前世紀の状況から素材を開放したのだ。」^{注39)}

ここでは、建築物は単体として成立するものではなく、都市的活動の連関の中で捉えられる必要があり、生活・活動の連続性が建物の「空間的価値 (räumlichen Werte)」を基礎づけることが提示されている。この見解は第4回において強調される。

第4回では、スタムは都市についての史的考察から論考を展開する。中世には都市計画の観点がなく、その形成原理は独立建築物の集合であり、街路空間は狭く曲折していた。バロック期では、都市

計画家の視点から街路空間が整備され、ファサードが都市計画のテーマとなったが、これは住民の生活や日常活動を表しておらず、ファサードは建物を覆い隠す「衣類」^{注40)}のようなものとどまる。19世紀になると郊外型都市公園の理念が都市計画へと影響をあたえ、ヴェルサイユやシカゴ地区整備計画においては「主題 (Hauptmotive)」「ハイライト (Höhenpunkte)」「構成 (Komposition)」が主要テーマとされたが、スタムはこれらを「私たちの精神にとっては偽りである」として批判する。そこで、都市における人間活動を支える基盤としての街路空間に着目し、交通問題の解決こそが、「生き生きとした都市組織」を実現させるといふ。次のように示される。

「現代都市はもっとも強い現代意識からのみつくり出すことができる。すべての要因、すべての機能、生活全体はその空間を見出されなければならない。住むことは働くことと同じように素晴らしい。ビジネス街は工業地域と同じくらいに素晴らしい。公園の遊歩道は車道、鉄道網や駅舎、休憩や娯楽のための場所と同じである。都市計画家は都市の組織的本質について、本来的な意味において「触診し (abtasten)」しなければならない。それは力と集中を把握し、何千人もの人々の需要と要求を知ることである。彼らがこの組織の全てを明確に見通したとき、これらの基盤から全体を構築することが可能になり、生き生きとした時間意識 (lebendiges Zeitbewusstsein) は自ら新しい形態として現れてくるだろう。」^{注41)}

このような観点によって形成された都市が「生き生きとした都市組織」であるとされる。具体的方法として、スタムは街路空間や広場の標準化、および個々の建築物における最大限の経済性を追求した建設方法を提唱する。この論点はさらに拡張され、都市の「無限の広がり (unbegrenzte Weite)」の見解が示される。運河、道路、鉄道などの交通網の整備は、中世から継続される都市の閉鎖的状況を打開し、都市の「流動的な生活 (strömende Leben)」に内在する「力」や「エネルギー」を開放することで、「生きている、流れるような空間 (lebenden, fließenden Raum)」とともに、都市の「広がり」が形成される。そして交通網は最終的には他都市と結合されるまでに発展し、都市間の連合によって「世界都市 (Weltstädte)」が構築されるという。

3-4 スタムの「生き生きとしたもの」の展開

論考「オランダ建築」では、バルラーへの「合理的理念」、ハーグ・グループの「物質の力」、アムステルダム・グループの「活動の流れ」を辿り、第4回においてスタム自身の「都市計画」の理念が導きだされた。スタムはこれらの展開の中で、たびたび「生き生きとした (lebendig)」という語を用いており、彼の思想において重要な言葉であることが推察される。本節では、スタムの「生き生きとしたもの」の諸相をとらえ、その内実の考察を試みる。

スタムの「生き生きとした」の用法は二つに大別できる。第一に「アムステルダム証券取引所」(第1回)において示される、形態表現における用法である。証券取引所では、特有の価値・機能をもった部屋が外部ヴォリュームにおいて表現されており、これを「生き生きとした、複雑なヴォリューム配置 (lebendigen, verwirrenden Massengruppierung)」であるとスタムは述べる。これは合理的、客観的価値判断にもとづいて、諸要素の機能が有機的に関連し、内部の力(要因)から外部形態が演繹される様態を意図していると解される。第二に第3回から第4回にかけて示される、空間のつながりを示すための用法である。ここでは「生き生きとした力」、「生き生きとした生

表2 各論点のまとめ

論者	論題	合理的なもの	精神的なもの	都市計画	生き生きとしたもの
スタム	「オランダ建築 1」	ベルラーへの「合理的理念」、「否定」に着目	-	-	「生き生きとしたヴォリューム配置」
	「同 2. ハーグ・グループ」	「合理的理念」は「物質の力」として展開	ハーグ・グループの合理性追求は精神性を満たす	都市的課題解決のために「物質の力」は重要である	「生き生きとしたエネルギー」
	「同 3. アムステルダム・グループ」	-	「喜びの表現」は精神的なものである	「活動の流れ」に着目	「生き生きとした力」
	「同 4. 都市計画」	-	-	「交通問題」に着目し「都市の広がり」を主張	「生き生きとしたもの」「生き生きとした都市組織」
ウィプフ	「論評・オランダ建築」	スイスの伝統的技術の合理性に着目	-	スタムの都市計画を評価	-
メイリ	「国外の建築 1」	オランダ建築の合理的傾向を批判	スウェーデンの傾向に「精神的独立」を見出す	-	-
	「同 2」	-	国家統合の象徴としての「三つの王冠」に着目	-	-
	「同 3」	-	今日においても「情念」は重要な課題であると主張	-	-
シュミット	「往復書簡」(メイリ宛)	-	「日常の問題」への考察が精神的解決をもたらす	-	建設の基本理念として「生き生きとしたもの」を提唱
メイリ	「往復書簡」(シュミット宛)	-	「情念」の重要性を強調	-	-

活」、「生き生きとしたエネルギー」として表現され、総じて、アムステルダム・グループが着目した都市における「生活 (Leben)」と「運動 (Bewegung)」が「活動の流れ」として、流動的に部屋から外部へと展開されている様態を指し示している。この2つの意味は、第4回において、名詞化された「生き生きとしたもの (Lebendig)」、あるいは「生き生きとした都市組織 (lebendig Stadtorganismus)」として再定義され、形態表現と空間のつながりの両者を含んだ動的な連関を指す語として拡張される。以上より、スタムの「生き生きとしたもの」^{注42)}は、建築・都市を構成する各要素が有機的かつ動的にかかわり合い、「広がり」として外部へと拡張される都市像を目指すという新しい形成原理を形容する語であることが指摘できよう。

一方、この「生き生きとしたもの」については、シュミットも「往復書簡」において用いている。

「私たちにとって、建設とはもはや美しい響き、完成したモチーフの収集、ムードの演出の引用ではなく、生き生きとしたもの (Lebendigen)、時流に合ったもの (Zeitgemassen) から生じる要素の形成である。」^{注43)}

シュミットの言説においては、「生き生きとしたもの」は「往復書簡」が初出であり、「オランダ建築」の翻訳を通じて、シュミットが自身の見解として展開させた。スタムは建築から都市への動的な変化を引受ける概念として「生き生きとしたもの」を拡張させたが、この時期のシュミットの言説における「生き生きとしたもの」は、スタムがいうような広がりを持った概念ではない。むしろ、シュミットは、スタムに倣い建築物の形成における動的要因を捉えようとする視点を抱いていたようである。

4 結

以上の分析・考察から把握された論点を論考ごとにまとめる(表2)。第3章の分析からは、ウィプフは「合理的なもの」に、メイリは「精神的なもの」にたいしてそれぞれ自身の見解を述べスタムの論点に反論したことが把握された。ウィプフ、メイリの各々の立場の相違はあるが、スイスらしいものを求めるという点において彼らの見解は一致しており、またヘーグジヒら建築家連盟のメンバーにおいても、この傾向が確認できる。

一方、スタムの論点に着目すれば「都市計画」を論じたところに彼の主張があったことが確認された。ベルラーへの「合理的理念」、ハーグ・グループの「物質の力」、アムステルダム・グループの「活動の流れ」に拠りながら、スタムは自身の「都市計画」への観点を発展させ、動的要因に着目した都市論の構築を試みた。「生き生きとしたもの」はスタムがこの「都市計画」を論じる上で重要な視点であったといえよう。「都市計画」については、ウィプフ、メイリ、シュミットらスイス人建築家が表立って論じることはなかった。しかし、シュミットの論考においては、「生き生きとしたもの」が建設の基盤として捉えられている。本稿で扱った資料からはその全体像は解明されないが、この時期において、シュミットが都市・建築の動的な様相を捉える視点を抱いていたことは確かである。

今後の課題として、この論争における議論や「生き生きとしたもの」の展開をふまえ、シュミットを思想を中心に、ABC グループの建築理念の形成過程の解明が求められるだろう。

小論において、研究資料としてとりあげた主要雑誌文献は以下の略号につきスラッシュ(/)にて巻、号、頁、年を示す。

[SBZ] : „Schweizerische Bauzeitung“ (『スイス建設新報』)

[WBW] : „(das) Werk“ (『ヴェルク』)

[ABC] : „ABC: Beiträge zum Bauen“ (『ABC: 建設への寄与』)

例) [SBZ/83/1/16-18/1924] : 『スイス建設新報』83巻1号、pp.16-18、1924
 なお『建設新報』、『ヴェルク』の略号は、スイス学術図書館協会 (Konsortiums der Schweizer Hochschulbibliotheken) のそれに準ずる。

注

- 注1) スタム、シュミット、エミール・ロートを中心に発刊された建築雑誌。1924年から1928年にわたり1期6号、2期4号、合計10号が刊行された。
- 注2) ABCグループにかんする定義は諸説あるが、本稿においては、『ABC』の刊行に関わったシュミット、スタム、ヴェルナー・モーザー、エミール・ロート、ハンネス・マイヤー、M・E・ハエフェーリ、ルドルフ・スタイガーらを主要構成員として捉えている。
- 注3) Ingberman, Sima: ABC: International Constructivist Architecture, 1922-1939, The MIT Press, Massachusetts, pp.49-110, 1994 (宮島照久、大島哲蔵訳: ABC: 国際構成主義の建築 1922-1939、大龍堂書店、pp.38-89、2000.12)
- 注4) Eric Munford: The CIAM Discourse on Urbanism, 1928-1960, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, pp.9-123, 2000
- 注5) Ingberman, Sima: op. cit., pp.35-46 (宮島照久、大島哲蔵訳: 前掲書、pp.26-34)

注6) 論争への間接的関与が確認できる記事として、次の3編がある；
Moskau, Rossland, Amerika, Schweiz, [ABC/1/1/1-2/1924]；Schmidt, Hans: „Vers une architecture“, [SBZ/83/6/68-69/1924]；Schmidt, Hans: Die Baukunst und liebe Gott, [ABC/2/1/7-8/1926]

注7) Stam, Mart: Holland und die Baukunst unserer Zeit, [SBZ/82/15/185-188/1923] (第1回), [SBZ/82/18/225-229/1923] (第2回), [SBZ/82/19/241-243/1923] (第3回), [SBZ/82/21/268-272/1923] (第4回)

注8) Wipf, E.: Holland und Baukunst unserer Zeit, [SBZ/82/24/317-318/1923]

注9) Meili, Armin: Wir und die Architektur des Auslands, [SBZ/83/1/5-7/1924] (第1回), [SBZ/83/2/20-22/1924] (第2回), [SBZ/83/3/31/1924] (第3回)

注10) Schmidt, Hans, und Meili, Armin: Korrespondenz. – Zum Rathaus im Stockholm, [SBZ/83/9/106-107/1924]

注11) S・イングバーマンはインタビューや遺稿、手紙などの資料の読解をとおしてABCグループの1922年から1939年にわたる活動を明らかにした。その中でシュミットとスタムが『ABC』の発刊にいたる経緯として、この論争が重要な位置を占めていたことを指摘している (Ingberman, Sima: op. cit. (宮島照久、大島哲蔵訳：前掲書))。また、E・マンフォードは文献資料や議事録、手紙などの読解をとおして、1928年から1959年にわたるCIAMの活動と議論の内容を明らかにした。とりわけ、CIAM初期(1927-30)の論述においては、スタムやシュミットらのドイツ語圏の建築家とル・コルビュジエらフランス語圏の建築家の政治的意図の対立に着目した。(Mumford, Eric: op. cit.)

注12) Senn, Otto H.: Der Architekt Hans Schmidt, [WBW/59/10/548-552]；Tafari, Manfredo: Hans Schmidt – ein «radikaler» Architekt, [WBW/59/10/552-553]；Steinmann, Martin: Hans Schmidt. Zur Frage des Sozialistischen Realismus, [WBW/59/10/553-556] 0. Seenはシュミットの事績紹介を、M. TafariはABC期(1924-28)とソヴィエト期(1930-37)のシュミットの思想の展開を、M. Steinmannは社会主義者としてのシュミットの建築思想の側面をそれぞれ記している。たいてい本稿はシュミットの思想の背景にある論争の議論の構造を解明するものである。

注13) Oechslin, Werner: Hans Schmidts systematischer Weg zur Moderne, Werkkatalog von Oechslin, Werner: Hans Schmidt 1893-1972 Architekt in Basel, Moskau, Berlin-Ost, gta Verlag, Zürich, pp.9-26, 1993

注14) 代表的なものとして、矢代真己：建築家マルト・スタムのヴァイセンホフジードルングとの関わりとその業績について、日本建築学会計画系論文集 第466号、pp.173-182、1994.12；矢代真己：建築家マルト・スタムの近代建築理念の性格と特徴について、日本建築学会計画系論文集 第541号、pp.265-270、2001.3；矢代真己：建築家マルト・スタムの1920年代の作品にみる鉄筋コンクリート・ラーメン構造の意味について、日本建築学会計画系論文集 第545号、pp.309-316、2001.7、がある。

注15) 本稿では「オランダと私たちの時代の建築芸術」と邦訳。

注16) Hässig, Alfred: Moderne Strömungen in unserer Baukunst I, [WBW/10/7/184/1923]；Hässig, Alfred: Moderne Strömungen in unserer Baukunst I, [WBW/10/7/184/1923]；Müller, Max: Moderne Strömungen in unserer Baukunst II, [WBW/10/8/209-210/1923]；Zollinger, Otto: Moderne Strömungen in unserer Baukunst III, [WBW/10/9/235-236/1923]；Camenische, Paul: Moderne Strömungen in unserer Baukunst IV, [WBW/10/10/261-262/1923]；Gilliard, Fred: Les tendances actuelles en architecture V, [WBW/10/11/287/1923]；Hässig, Alfred: Moderne Strömungen in unserer Baukunst VI, [WBW/11/1/26-27/1924]

注17) Hässig, Alfred: op. cit. (I), [WBW/10/7/184/1923]

注18) Camenische, Paul: op. cit. (IV), [WBW/10/10/261-262/1923] カメニッシュは「古い形態を発展させたもの」には創造性がなく、「人間の精神を否定するものである」とし、新しい様式の必要性を説いている。

注19) Müller, Max: op. cit. (II), [WBW/10/8/209-210/1923]

注20) Hässig, Alfred: op. cit. (VI), [WBW/11/1/26-27/1924] この論考でヘーグはスタムの「オランダ建築」にコメントを寄せ、国外の建築からの影響を排除すべきという自身の論点を強調し、問題解決のためには建築家同士の「意思の疎通 (Verständigung)」が必要であると述べている。

注21) Moser, Karl: Neue Holländische Architektur – Bauten von W. M. Dudok, Hilversum, [WBW/9/9/205-214/1922]

注22) Bernoulli, Hans: Zwischen den Schlachten, [WBW/10/8/185-191/1923]

注23) Werkkatalog von Oechslin, Werner: op. cit., p.377

注24) 論考中においてハーグ・グループの明確な定義はされていないが、B・ペイフット&J・ダウカーによる「アムステルダム国立芸術アカデミー」の図版が大きく掲載されている。またJ・J・P・アウトの「国民住宅」やスタムの「ケーニヒスベルクのオフィス計画案」の図版も掲載される。一方、西欧近代建築史において一般的にアムステルダム派に対をなすグループとされるロッテルダム派 (デ・スティル) についての言及は確認できない。

注25) アムステルダム・グループについても明確な定義はされない。

注26) ベルラーへの「否定」の理念については、ヘーゲルのそれを背景としている。建築史家P・シンゲルベルク (Pieter Singelberg, 1918-2007) は、ベルラーへは少年期からヘーゲルの『美学』を幾度も読み返しており、ヘーゲルから思想的影響を受けたことを指摘している (Singelberg, Pieter: H. P. Berlage - Idea and Style, The Quest for Modern Architecture, Haentjens Dekker & Gumbert, Utrecht, pp.169-177, 1972)。

注27) 本文では、ドアとテーブル、椅子のデザインの解説が、キャプションではファサード、階段質の壁面のディテールの解説がおこなわれる。

注28) Stam, Mart: ibid. (II), p. 228

注29) それぞれの「喜び」について明確な定義・分類はされないが、スタムの論調からはアムステルダム・グループの自発的・能動的な表現衝動について肯定的に捉えようとしていたことが伺える。

注30) 論考「国外の建築」において、メイリはスタムのデザインにたいして、目的意識の探求の成果として導きだされた「部分的精神的建築有機体 (teilweise durchgeistigtsten Bauorganismen)」として批判する。この論及からは、オランダ派にみられるような合理性のみの達成は、精神的なものを十全に満たすことができないというメイリの立場が確認できる。

注31) Bonatz, Paul (1877-1951) 設計。1914年着工。1927年竣工。

注32) Östberg, Ragnar (1866-1945) 設計。1911年着工。1923年竣工。

注33) 例えば、煉瓦でつくられた外壁面においては、いくつかの囲まれた部分がデザインされている。この煉瓦は、9.5×13×27cmというスウェーデンの伝統的な規格煉瓦であり、全ての手によって生産されたものである。この熟練した使用方法と喜びある表現形式が融合し、多様な表現が達成されていることを、メイリは賞賛している。

注34) 川島洋一によればスウェーデンにおける民族ロマン主義 (Nationalromantik) は1890年代から1910年代にかけて興隆した (川島洋一: アスブルンドの初期の活動について グンナー・アスブルンドの建築に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集 第499号、pp.207-214、1997.9)。デンマークの敗戦やフィンランドのロシア化などの影響をうけ、スウェーデンでは伝統と固有の風土に立脚した建築像を求める風潮が強くなった。これにたいし、スウェーデンの建築家は「現実主義」や「現代的」というテーマの下、建築材料の正直な使用、機能の造形的表現、折衷主義による装飾の排除、建物全体のヴォリューム配置に着目し、時代に適合した建築様式を追求したことを川島は指摘している (川島洋一：前掲、p.208)。

注35) Meili, Armin: op. cit.. (II), [SBZ/83/2/21/1924]

注36) Schmidt, Hans: ibid., [SBZ/83/9/107/1924]

注37) Wipf, Edwin: ibid., [SBZ/82/24/318/1924]

注38) 「アムステルダム市南部にある作品」については、その作品名は明記されていない。だが、同頁に掲載された図版では、デ・クレルクの「デ・ダヘラート集合住宅」(1922年竣工)が参照されている。

注39) Stam, Mart: op. cit. (III), [SBZ/82/19/242/1924]

注40) スタムは「衣類」と「裸体」を比較し次のように前者を批判している；「建築は衣類となってしまった。人々はそれを生活に羽織らせる。なぜなら一度そうしたからである。二、三十年ごとに衣類に新しい飾りをつけることの需要が生じ、常に過去の時代から様式が奪い取られ、衣服を使い古すことにより裕福ではあるが下品な飾りが付け加えられた。・・・(中略)・・・決して人々はその体を思い切って明確な裸体 (klarer Nacktheit) としてさらけ出すことはしないし、それどころか人々は自らの存在をまったく忘れてしまったのだ。」(Stam, Mart: op. cit. (I), [SBZ/82/15/86/1923])

注41) Stam, Mart: op. cit. (IV), [SBZ/82/21/269/1923]

注42) 「生き生きとしたもの」の観点においては、動物や植物などの生物の有機組成への接近が確認できる。例えば、「オランダ建築」(第3回)では、アムステルダム・グループの柔軟な造形手法にたいし、「動物界や植物界の器官、もしくは機械部品や造船のことを私たちに考えさせる」(Stam, Mart: op. cit. (III), [SBZ/82/19/241/1923])とスタムは述べており、生物や機械の様態をアナロジーとした建築物の形成に対する観点をもっていたことが確認できる。

注43) Schmidt, Hans: ibid., [SBZ/83/9/107/1924]

(2011年2月10日原稿受理、2011年7月26日採用決定)